

立川曾秋と『曾秋随筆』

——蕉門俳諧と石門心学の接点として——

田 中 道 雄

(一九七五年十一月六日受理)

立川曾秋(宝曆八—文化二五)は、今日ではほとんど無名の、一地方知識人にすぎない。しかしかつては、学界にその名を知られたことがあった。石川謙氏の『近世日本社会教育史の研究』(昭和一三刊)『石門心学史の研究』(同年刊)に登場するのであるが、曾秋はまず、近世中期の心学運動家、つまり社会教育者として、現代のわれわれに記憶されたのである。

ところで筆者は、同時代の芭蕉顕彰家として著名な京の俳僧、五升庵蝶夢(享保二七—寛政七)の周辺を調査する内、蝶夢の経済的支援者としての曾秋の役割りや、蝶夢の思想の理解者としての曾秋の位置が、ともに重要であることを気付くに至った。そして、蝶夢らの信奉する蕉門俳諧と石門心学が共有する性格やその関連性を解明する上で、その両者にかかわった曾秋が、恰好の研究対象たり得る人物であることを知ったのである。

前述のように、曾秋の知名度はいまだ低いから、本稿ではまず、その生涯と思想の概略を紹介しようと思う。曾秋の研究は、文学史にとっても社会教育史にとっても、その両者の接点の人物として興味深く、ま

た、きわめて初期的段階のものではあるが、文芸教育史上の問題としても、一応注意するべきと思われる。なぜなら、当時の蕉門俳諧は、庶民教化をたてまえとする文芸であり、その思想の延長上に曾秋の心学入信があったからである。従来の研究に乏しいので、いきおい資料中心になることをお許しいただきたい。

—

最初に、その生涯について述べよう。それには、立川欽一氏所蔵の『立川肥遯君事蹟』^{註一}が第一の資料であるから、まず、その全文を次に紹介する。

*

〔立川肥遯君事蹟〕

肥遯君、名は政伸、字曾秋、性立川、雅名は銀之介と称し、後庄十郎

と改、金右衛門と称す。後莊平と改め、自ら肥遯と称し給へり。世々和田村に住り。父は遊賀君、母は中尾氏の女也。為人温厚篤実にして、至りて儉遜なり。生質柔弱にして病多し。しかれともよく是を守り、養生の功を積給へり。父の養育も正しかりしに、よく其命にしたかひ、少しも違ひ給ふ事なし(註二)、甚志を継給へり(其カ)。

一若きときより俳諧を好み給ひ、伊賀の桐雨・一長者坊等にしたしき、幻阿法師を師として学ひ給へり。沂風・菊二・杜音等はしたしき友たり。若きときより年老たる人に親しみ(む)、事を好み給へり。

一父の業を継給ひて(年二十六七才なり)、常に業(農事)を大切に心懸給へり。且、米粟交易の業をし、大津・伊勢などへは度々暑寒の厭ひなく(数々)行給へり。これみな父の命にしたかひて、少しも自らの物好し給ふ事なし。

一安永七年の比、大久保村西田氏の女を娶り給ひ、一男子を生り。母子ともに先達て没し給へり。天明元年五月、伊賀国上野西村氏の女を娶り給ひ、一男子五人を生めり。

一年二十四五才の比、肝鬱の症にて久しく脳み給ひしか、京なる医師後藤何某灸治を進められしを深く進用し給ひ、三年のほど日々灸治をすへつゝけ給ひしとそ。其功にや、病およそ愈給へり。其後も月々三三度つゝ灸をすへ給ふ(ひ)て、深く身を慎しみ養生し給へり。

一寛政元酉年七月、母病を病給へり。其比令閨(イ)身居給ひければ、病に感し給はむ事を恐れ給ひて、かたく母看病をさせ給はず。奴婢の類ひは年若きものなれば行届く事あたはず、肥遯君、昼夜心を尽、看病し給ひしなり。終に八月九日といふに、母身まかり給へり。深哀傷し給ふといへとも、父いまたすこやかにいませは、その追功の精をあらはし給ふ事。あたはず、ひそかに母の喪をつとめ給ひしとなり。

一寛政二戊のとしのころ、石田先生の門人にて諸国へ道を弘められける

北村翁、伊賀国より来り、はしめて道話講尺等を聞給ひしか、かねて沂風坊のすゝめによりて、先のとし堵庵先生にも一度相見し給ひし事もありければ、いよ／＼此道を尊ひ厚く信し給ひけり。夫より北村翁はしめ度々講師を請待し、家族はいふに及はず、村中并近村に至るまで同士の人を誘ひ、懈怠なく修行し給ひけり。(奥村)望月山下等と常に会輔討論等し給ひて、油日村江度々通ひ給へり。

一寛政五丑とし、(同志とかたらひ、終に)方来舎を営みて、(原本)淇水先生を請待して開講をねかひ給へり。(其比ハ)此道(日々)同志の人々も多く、殊外盛なりしかとも、真実に志の立たる人もすくなくして、はしめ志厚かりし人も日々に無数なれり。しかれとも、(なりて)只三五輩の同志の人と、月々の会輔怠りなく務め給ひ、且朝夕家事多忙の中にて、朝は早く起、夜は遅く寝て、少しも(の)暇をもおしみて書を見給ひ、その疑し事は記し置、度々京に登り給ひ、上河先生にて正し給へり。先生も深く愛憐し給ひて、方来舎には度々下り給ひて数日逗留し給ひしなり。夫ゆへ、淇水翁には深く親炙し給ひしなり。

一天明三年の比、父遊賀君家事(勤役)を辞し給ふて、(乙)則翁に(家事悉く君に譲り給へり)、同し勤めを命し、同年七月、男政瑞を生給ふ。すへて六男有て、女子一人もなし。

一寛政七卯年六月、九月に至、君家に凶事ありて、召れける。九月十九日出立にて東武に下り給へり。(此時、主家の大故にて、深く心を勞して勤め給へり)、(未明)当君(公)、いまた幼少にて、同家のかたに寓居を命られ給へり。其事終りて、十月廿六日帰国し給へり。

其後文化三寅年二月より、ふたゝひ東武に下り給ひ、堀田君の御家事等、その采地の人々とはかりて、深く心を尽し給へり。此度は(原本)君家に事もなかりければ、ゆる／＼日を重ねて居給ふへき(く)おほ

しけれど、江戸大火事ありて、これにおそれ、やかて国にかへり給へり。

一 平常、朝はやく起たまひ、夜の更るはいとひ給へり。日夜の家事繁けれとも、少しもおこたり給ふ事なし。何ほと閑しき日といへとも、朝夕のうち、(少しにても) 書を見給はぬ日はなし。外に出給ふ時も書を懐中し、少のいとまをしみて書を見給へり。平常社友の人來りて物語果ぬれば、少しなりとも道学の物語し給はぬ事はなかりし也。

一 衣類調度に物好し給ひし事なし。只有にまかせて用ひ給へり。(然れとも) 貴人より賜へる服は、其時によりて用ひ給へり。常に清きを欲し給ひしゆへ、よこれ汚たるものは用ひ給はず。洗たるものは新らしきものと新しく用ひ給へり。刀脇差のるい、少しも物好し給ふ事なし。有來のまゝ修覆を加へて用ひ給ひし。鮫鞘の脇差を一腰とへの給ひし事あり。其後、有來の刀脇差を衣糸柄に作り給ひし事あり。年老給ひて輕き鹿なる大小を求め給ふ事あり。其余いさゝか物好し給ふ事なし。小道具といへとも、とへの給ひし事なし。其余は推して知るへし。

一 食は鹿なるものを好み給ふ。魚(鳥の)類は、好み給はず。若有合候ても、少しより用ひ給はず。酒は少しつゝ嗜み給ひて、日々一度つゝ用ひ給ひし。さかなは何も好み給はず。有合のものを用ひ給へり。麦飯、或は(菜・)大根・牛房・苡茄子・竹の類は、好みて喰し給へり。其余のものは、嫌ひ給ふにはあらねと、余り好み給はざりし。若き時より病身に居給ひしゆへ、喰の養生はかたく慎しみ給へり。生冷のものは、(菜の外は) 用ひ給はざりし。茶は好みて、煎茶を(梨子・柿・密柑) 常に嗜給へり。菓子、厚味のものは用ひ(好み) 給はず。淡薄のものはかり用ひ給へり。

① 何かたへ行給ふにも、帰りの日を定め置たまひて、夫より少しも後れ給ふ事なし。若遅く成候時は、人をして其旨告給へり。告すして日限の(を) 違へ給ふ事なし。常に恭敬厚く、何事も慎しみ給へり。仮にも戲言・戲動の事⁵はなかりし。去なから其中に自ら和はとへのひて、人の言をよく容給へり。朋友より諫むることは、かならず厚く信用し給へり。

一 農業を大切に心懸給へり。田うへの時は、かならず自ら手伝ひ給へり。畑は常々手伝ひ給ひ、秋千物などは、(抛々心付給へり。)⁶ 僕⁷の所為夫々差図し給ひ、少しも怠り給ふ事なし。田うへの後は、日々自ら見廻り給へり。

一 居室は、有のまゝに修覆を加へて、新規のものは少しも建給はず、享和三亥とし、かねて年比心懸給ひて、持仏堂を作り給へり。此外にいさゝか建物作り給ふ事なし。其後、政常か宅を作り給へり。文化⁸以下

一 先代より伝へし道具類は、いかにも大切に用ひ給ひ、其外道具類、当用の外何にても求め給ふ事なし。常々示していわく、衣類調度とも鹿粗なるものほど日用の調法なり。形よきものは取扱にも氣遣にて、鹿粗なるものほど用なし。形とへのへましきとなり。

一 米粟交易の業は、子孫に至り其害あらん事を恐れ給ひ、其父遊賀君に告給ひて、寛政⁹年¹⁰の比より、果と止給へり。

一 春日の社、年古く成大破に及ひければ、村内のもの深く痛みにならぬやう謀り給ひて、文化元子年にことごとく造営成りぬ。此事、深く心を¹¹用ひ給へり。

一 朝暮、神仏師を拜し給ふ事。(ことに) 祖先の忌日、祥月等には熟々祭り給へり。文(享和)三亥とし、持仏堂土木なりしより、年々春秋の祭、誠敬を尽して祭給へり。¹²

この『事蹟』は、心学的立場から、その業績と生活態度を賞揚することを主眼とするが、一方では、簡にして要を得た略伝ともなっている。他の資料も援用しつつ、その生涯を簡単に辿ってみよう。

曾秋立川金右衛門政伸は、宝暦八年七月二十五日、近江国甲賀郡和田村（現滋賀県甲賀町）に生まれた。同家は代々、旗本伊賀守和田伝十郎（伝右衛門とも）知行地の代官を務めた家柄で、政伸は三代目金右衛門政峯の次男（兄専太郎は早世）として生を享けたのである。家業は農を主としたが、米・粟・綿などの交易にも携わり、藤堂家など高位の武家の金融にも応じていた。天明三年（二六才）家業を受け継ぎ、寛政七年（三八才）家督を相続して金右衛門と称し、文化七年（五三才）それを次男政瑞（長男は早世）に譲って莊平と称した。曾秋・杉風庵は俳号、肥遯は心学上の号である。安永七年（二一才）に西田氏女を娶ったが没、天明元年（二四才）に伊賀上野の医、西村良化の女のぶを娶って、都合男子六人を儲けた。文化十二年十月二十七日没、行年五十九才。和田の善福寺の墓碑には「肥遯居士之墓」とあり、長文の銘文が、風化のため読みとれぬのは惜しまれる。法号、尋常声迎肥遯居士。葬儀の参列者一、三七〇人に及んだという。

心学への関心は、寛政二年（三三才）に北村柳悦の来訪あり、その講席に列したのが端初で、寛政五年三月にはついに自邸内に方来舎と名づける学舎を営むに至った。その急速な心学への傾倒は、父を憂慮させるほどであったらしく、曾秋は、

寛政五癸丑、父七十一才の云、未熟の学文たてをして、ものこと窮屈に心得たる、よろしからず見ゆる也。又、人の噂をするをきくに、

その人の行ひを善きの悪きといふ、つゝしむべき事そ。又、志なき人に先生の道の事物語する事あるへからず、と也。（方来舎聴書）と記している。性急な思想青年のように激しい求道の姿が、そこに思い描かれる。その後の曾秋の心学活動の実態を、石川氏の著書によって窺うと次の通りである。

氏は、入信後の生活二十六年間を三期に分け、寛政二年から同九年までの八年間（三三才～四〇才）を修行時代、寛政十年から文化四年までの一〇年間（四一才～五〇才）を近郷近国へ教化布教に向くようになった時代、文化五年から同十二年までの八年間（五一才～五八才）を心学振興に渾身の力を注いだ時代とされる。そして曾秋の『講席覚』に基いて活動年譜を作成し、その生涯の講席が一、三〇〇回余にも達したと、第二期の活動地が方来舎を中心とした郡内五箇村（和田・油日・毛牧・滝村など）と伊賀国三箇所（上野の有誠舎・柘植村の麗沢舎・友田村の山尾氏宅）に限られたのに対し、第三期にはその範圍が著しく拡大して、近江・伊賀は勿論、伊勢・大和を含む四箇国二〇地方にも及んだこと、また中山美石（国学・儒学に達す）を通じて尾張・三河にも影響を与えたこと、等々を実証された。また氏は、曾秋が近江心学の中心人物として目覚ましい活躍をなし得た要因として、「その優れた人物と、絶えざる修養と、充実した財力」の三つを挙げ、他に京都正統派勢力の支持後援を指摘しておられる。中でも、手島堵庵（享保三―天明六）の高弟上河淇水（寛延元―文化一四）の寵遇を受け、淇水やその門下の来援を得たり、淇水の遊説に同道して協力したりしたと言う。つまり曾秋は、地方に育った心学者として地方に活動基盤を持ち、一方で京の指導と後援を受けつつ、京を中心として拡大する心学運動の一翼を担ったのである。

このようなことを知るにつれ、私は、心学活動に先立って参加した、

曾秋の俳諧活動との類似が思われてならないのである。俳諧の師と仰いだ蝶夢は、やはり京にあって全国的規模の蕉門中興運動を進め、地方の支持者に指導と援助を与えていた。曾秋はこれに応じて協力を惜しまず、天明六年には、蝶夢編『芭蕉翁俳諧集』の刻板料を出資していた。

また、曾秋が心学を最初に布教した地域に関しても、思い当ることは多い。石川氏によると、上柘植の麗沢舎は寛政五年頃の創立、曾秋の指導のもとに創設経営されたと言う。和田から南へわずか二、三里の上柘植には、曾秋ともっとも親しい俳友・富田杜音がいた。蝶夢からの書簡も、「杜音様・曾秋様」と連名のもの多く、同階層の両者（杜音は大庄屋）は、社会的・経済的にも密接な関係にあったと思われる。杜音宅は、後に曾秋の講席会場に使われることがあった。俳友が、思想上でも友として協力することは、当然あり得ただろう。伊賀上野は、上柘植からさらに西南へ四、五里の地点。その上野の講席会場築山氏宅とは、築山忠右衛門邸と思われる、豪商平野屋を指す。天明二年に没した先代は、桐雨と号した当地俳壇の中心人物で、『事蹟』に記すように曾秋とも近く、蝶夢との親交で知られていた。その築山家は、曾秋の姉が嫁した上野の内神屋窪田惣七郎家と姻戚関係にあり、上野会場の一である西村氏宅が、曾秋の後配のぶの実家と思われることも注意したい（因みに西村家には、後に曾秋の三男重昭が入籍して恕安と称し、心学にも携わった）。石川氏は、上野の有誠舎創立を寛政七、八年頃と記されるが、これにもまた曾秋の影響を察し得るのである。このように、和田―上柘植―伊賀上野のルートは、曾秋等にとつて、社会生活・経済生活や文事を営む上の、基本的な回路をなすものであった。『事蹟』にも、「石田先生の門人にて諸国へ道を弘められける北村翁、伊賀国より来り、はじめて……」と言う。勿論上野から来たのであり、その同じ道を、行脚俳諧師も通ったはずである。そしてまた『事蹟』が、「かねて沂風坊のすゝめにより

て、先のとし堵庵先生にも一度相見し給ひし事もありければ……」と続けるのも見逃してはなるまい。そのルートは北へ進んで湖南に出、さらには京へ連なる。湖南には蕉門俳諧の聖地として義仲寺があり、蝶夢の親弟沂風坊がその看主を勤めていた。曾秋は、その俳友のすすめで、晩年の手島堵庵にも会っていたのである。

二

ここで曾秋の俳諧活動の概略を述べよう。これまで曾秋の俳諧について記されたものは、『新選俳諧年表』の一項と、西村燕々氏の「近江俳人列伝」第一〇一回「立川曾秋」の記事だけと思われる。西村氏稿は、『太湖』誌一三六号（昭和12・5・9）に掲載された小文であるが、要を得たものである。

西村氏は、曾秋の初出俳書を安永五年刊の『笠の露』（琴之等編の文下追善集）として、

ゆふかほや門わろくさき馬盞

の句を示されるが、俳諧への親近を、この十九才の頃と推定して、ほぼ誤りはあるまい。俳系も、蝶夢等のそれと思われ、翌六年からの『しぐれ会』（年刊芭蕉追悼句集）には例年出句を見る（安永五年刊『しぐれ会』への投句もあり得たであろう）。その『しぐれ会』所収の曾秋句を、当初のものだけ掲げてみよう。

宵闇やこほれて通るはつ霰

鶏の啼ほとに晴てはしくれ哉

しくるゝ夜みるや翁の終焉記

はせを忌やおもへは遠き世でもなし

翁忌や尾花に伊賀の人恋し

（安永六年・二〇才）

（安永七年・二一才）

（安永九年・二三才）

（天明二年・二五才）

（天明三年・二六才）

安永九年以後の句が、芭蕉追慕の情を色濃くたたえるのは、次第に蝶夢の感化を蒙るに至った、曾秋の意識の発展を反映するものと思われる。蝶夢の曾秋宛書簡は二、三通しか知られていず、その指導の全貌は窺うすべもないが、杜音宛や自露宛の書簡に徴しても、きわめて懇切なものであったと想像し得る。そのように親密な交渉展開の帰結として、天明六年の『芭蕉翁俳諧集』上梓に際し、蝶夢から刻板料出資が要請されたのであろう。同書の跋で、曾秋は次のように記している。

この芭蕉翁俳諧集は、わか五升庵大徳のとしころひめおかれしを、同じ友にこの国の北浅井の住人何かし去何、ひそかにうつしけるなり。そもいまの世に、この道にあそふ人の、この翁の遺風をしたはざるはあらず。されはこそ、続扶桑隱逸伝の蕉翁の讚に、「この風雅は仏祖の肝胆なり。衆生の心性也。濁海の宝筏なり。夜闇の明燈なり。」と示し給ふとはあり。かくまていとたうときことわりあるを、ひとりのみ見んも無下なり。ひろく同志の人にもしらせまほしき、梓にちりはむるよしを、近江国甲賀山の杉風庵にて、

曾秋謹書。

『続扶桑隱逸伝』は釈義堂の著、正徳二年に刊行されたが、多くの仏者に並んで、芭蕉の伝が収まる。この芭蕉伝を最も尊重したのは蝶夢で、芭蕉画像の賛にもよくこの伝の記事を揮毫していた。その一節をそのまま跋文に取り入れた点にも、蝶夢の教えに忠実に従う曾秋の姿が想像できるのである。中でも重視すべきは、「この風雅は仏祖の肝胆なり。衆生の心性也。」という部分である。蕉風俳諧を、それが本質的に仏教的世界観・人間観に共通のものを持つと理解するのであり、蝶夢も、曾秋も、そのような認識から、蕉風俳諧を精神性高い文芸として重視し、高い評価を与えるに至るわけである。そしてまた、「かくまていとたうときことわりあるを、ひとりのみ見んも無下なり。ひろく同志の人にもし

らせまほしき……」と続く一節に注意を払うなら、価値ある文芸の庶民への伝道教化を意図し、行動へ向かって一步を踏み出そうとする、曾秋の姿勢が読み取れるであろう。

曾秋の作句は晩年まで続いた。しかし、心学に専念するようになってからは、さほど熱心だったとは思われず、句稿は残るが、句集は刊行されていない。このような寛政以後の俳諧活動の中で、特記すべきは、享和元年の『爾時庵発句集』刊行に関する事蹟であろう。同書は、曾秋を蕉風俳諧や心学に導いた沂風の句集で、曾秋は次のような跋文を寄せている。(句読点は筆者)

爾時庵琳澄法師者、洛陽高田山之衆徒也。自少、務一向専修念仏矣。為人、沾澹無事、而信樹下石上之趣。且勤行之暇、慕蕉門之俳諧、師事于五升庵主。其氣象風流不群、故字曰沂風、亦稱得往、一号方広。生質多病、而性好羈旅、常愛勝地、而徘徊于京師湖南之間、數年也。然終不卜容膝之草庵、優遊自在也。寛政十二庚申歲羅疾、同四月晦日、口唱名号、終於高田道場。享年四十有九。同葬于山内云。

享和改元之冬

湖東 立川政伸謹識

本書は、諸家の句を併載した追善集の形式をとらず、出版費用はすべて曾秋が負担したものと思われる。沂風の、専修念仏・優遊自在の境涯を愛した友情の発露であろうが、同集の巻頭句が、

且に一鉢をさくけてうゑす

夕に一衣をまとふてこゝえす

一日つゝ送るかうちに今朝の春

であり、巻尾句が、

出てはくらひ入てはねふりて

ほしいまゝなるをみつから策打て
ゆくとしやなき身につもる罪はそも

であるのを見て、曾秋の理想とした俳諧の性格が察せられる。

曾秋が親しく指導を受けた人物の一人に、『事蹟』にも記す長者坊浮流（天明二没）がいた。浮流は三河生まれの行脚俳人で伊賀友生村に定着し、曾秋や杜音等、近隣の俳人に影響を与えていた。その浮流宛の曾秋書簡を通して、若き曾秋の俳諧生活と意識を、もう一度探ることにしよう。天明元年以前のものである。

先日より御翰書ニも不預、無益之俗人と御下墨被下候哉、但者貴躰（マ）恙御座候哉、御様子承度候。

此ころ杜音には、翁之直伝を貴師より被承候由、あやしく承候。然れハ御安泰とハ奉存候に、故人何惜一床書、御返答可承候。重厚隠士も、首夏之比者御尋可被下旨被仰、何之さたなく、すへて今の隠士、虚言有之ハあさまし。売雪に一宿被成候由、いかなる門流にて候や。

惣体不風流、杜音之青あらし、佳章の様に被申越候も、左も不覚候。元来、風流の魂不居、いかにいふとも叶申間敷候。美濃流なとゞ貶し申こされ候へとも不分明、無詮事歟。只風流、魂入らハかくハ有ましく、野子など、是迄のほくひとつも魂なし。此うへもなし。暫口を閉て、古人の心をさくり申たく、その談合に、貴柄様なと御出可被下候。中々附句なと望不申候。已上

さ月八日

曾秋

浮流様

（中略）

この比、軒の葉山しけ山、かんこ鳥啼あへ申候。それに、田うへ
・麦かり、山里ハおかしきものに御座候。うき我をさひしからせ

よと申翁の御句、このうきといふ詞、いかゞ御聞被成候や。こゝらよしありけニ覚候。うき恋・うき人なといへるうきとハ相違、意味深長、無常迅速のきハにや。これを静ニうけ玉りたく候へと、俗事おほく心治らす、徒ニ相過候。恥し。

杜音と競うようにして「翁之直伝」を学び取ろうとする意欲、その意欲にそぐわぬ表現力の欠如、その表現力の有無がひとえに「魂」の有無に支配されると思考するところに、その意識の特色が認められようである。

「魂」が何をさすか、この文面だけでは窺い知れぬが、その「魂」を得べく、「暫口を閉て、古人の心をさぐり」たいと考え、芭蕉の閑古鳥の句の「うき」の語に、一つの手がかりを見出すようである。「意味深長、無常迅速のきハにや」と言うところを見ると、そこに何らかの精神性を求めることは明らかである。また曾秋が、自らを「無益の俗人」と自覚し、農村人らしく、田植えや麦刈りの農耕作業に目を向けるのも、注意されてよいであろう。それにしても、やや調子の高い曾秋の精進ぶりには、師の浮流も多少手を焼いていたらしく、右書簡受領直後の杜音宛書簡（五月十六日付）では、

……伊賀のむかし格別ニ存候。翁のしやう美被成候御道理有之、今の世はつかしく候。……むかしを起す一集、とよのへ申たく候。曾秋かたゞ不審なる事を申来（不明）事も云へく候。かくまで闇の眼を閉居候事、無念に候。……

と苦情をもらしている。

ここでいま一つ、曾秋周辺の雰囲気を紹介しよう。差出人も受取人も不明ながら、「和田へ参申候得共」とあるから、曾秋を訪ねた後の執筆であり、杜音来簡集の中に見出される一通ゆえ、受取人は杜音かそれに近い人物である。

寒気甚々鋪御座候得共、弥御家内様御安静ニ被成御入、珍重之到ニ

奉存候。

当月五日、和田へ参申候得共、此節之事ニ候得者心騒々鋪候而、付句も出来不申候。殊ニ、貴公之一心私の重りのはいかいも、御氣ニ入間鋪と申て、清書し不申候。少く隔り候印より付申候。御覽可被下候。御氣ニ入候所迄、御用ひ可被下候。

小子ハ至而はいかゝる下手ニて候得共、志を立る事ハ、いつれニもおとらしと奉存候。全く志の事とは奉存候得共、兎角氣転之才又無候得ハ、一卷の模様ニ出来不出来可有候と奉存候。貴君者一向宗念仏を御さとり被成(が脱)よく、小子ハ翁の意をよく察して、業ハ叶かたく候得共、志ハおとらしとうなつき、ひそかに悦申候。其元様ニハ、此場へハ今は御入被成かたく奉存候。私の重りのはいかいとハ言葉狂言ニて、面白く、理的中いたし候得共、納所場にて山家集御写し被成候事ハ、君臣之勤をわすれたる奴とやらにて、高声ニも不被申候。

露ときへまほろしとさめいなつまの影のことくに身ハおもふへし
との歌にさとりを取申候。

翁の志をさとりたる歌

ときもせずいひもゑざりしところをハしらぬ物そとしるそしるなる

心を安く持歌

うつりゆく月日のかすハかそふれとわかとしふるとしる人はな

斯心取申候。今よりハ我、鼻の長さ三尺五寸、飛行する事、東西南北一時にかける太郎坊・次郎坊もましめにひかへ可被申と奉存候。此文御一覽の上火中く。多罪く。此節のうつさんはなし、御用

赦可被下候。頓首

陸月十八日

(下略)

差出人は、「至而はいかゝる下手」を自認しながら、一方で「志を立る事ハ、いづれニもおとらじ」と強調する。蕉門俳諧の本質は「全く志の事」にあり、志さえあれば、少々の下手を埋め合わせることができる。そのように志を優先する文芸であるから、受取人の一向宗念仏のさとりにも匹敵し得、差出人は、芭蕉の志が、「ときもせずいひもゑざりしところ」つまり表現不可能の境地を、不可知の实在として認識するもの、と悟るに至ったのである。不可知であるから、そこに複雑な理論はない。浄土教が庶民にとって受け容れやすい教理を持ったように、蕉門俳諧も「ありのまま」「かざりなし」など平明な俳論によって普及した。右の書簡は俳論としては未熟なものであるが、見逃してならぬのは、二度もくり返された「私の重りのはいかい」という語であろう。これは、受取人のみならず、差出人にとつても否定さるべき作風の概念であったようだ。そして、この「私」の否定をくり返し説いていたのは、他ならぬ蝶夢であった。

蝶夢の俳論を詳述する暇はないが、その論の中核に位置するものとして、この去私の説があった。例えば、安永四年八月三日付の白露宛書簡では、

風雅の真趣と申事、(ママ、ま)大太夫たるへく候得共、野子杯ハ左も不存候。

法花経を我得し事ハ薪こり菜つミ水くミ得たるなりけり

行基菩薩

山はたの岨の立木に居る鳩の友よふこゑの凄き夕くれ

西行法師

枯枝にからすとまりけり秋のくれ

芭蕉翁

かゝる体にて、目前の実境、心外の余情に、一己の私意を交すして、申如たるを、真趣と覚え居申候。……

と述べるが、蝶夢の考える風雅の真趣とは、外界に相對して得られた素朴な感動を、それに作者の作意を加えず、忠実に言語化するものであった。この去私の説は、二柳など他の蕉門俳人の論にも見え、^{註一}決して蝶夢一人のものではないが、蝶夢の場合は、それが浄土教的觀念に結びつく点^{註一}が、特に注目される。

月といひ花といふ生死の一大事は、つねのあらましなるを、今更のやうに胸ふくれ、腸のきるゝやうに覚ゆるは、年比の契りのみか、我後の事をも頼み思ける事のかひぬるを、かなしとおもふわたくしにや。

限りなき五月の雨や我こゝろ

(自筆句帳)

浮流の死を哭す句で、哀傷の深さは、詞書からも充分に察せられる。しかし蝶夢は、その嘆きを個人的感情の次元でとらえることを恐れ、生死の一大事という普遍的な人間の問題として受けとめようと努めている。なぜなら、卑小な私意を捨ててこそ、仏の大慈大悲を期待でき、そこには大いなるものへの帰依がある。同様に、私意を捨てた自然(対象)への帰依こそが、蕉門俳諧の真趣を生み出すのである。蝶夢の句には、經文を題にした釈教の発句や、

娑婆世界といふを訳して堪忍土といふに

厚こほり水も心のまゝならず

(同 前)

など、自然詠に人生を託喻した、いわゆる諷諫の句が多い。そのような思想性を濃厚に漂わす俳諧が、去私を強調し、
智恵あらはしらし時雨の夕けしき ^{丹後宮津} 季友(安永四・しぐれ会)
と知を否定するのは、重要な問題である。

曾秋の意識からその周辺の雰囲気へ、さらに蝶夢等の俳諧の特質へと筆を進めてきたのは、そこに心学との共通的性格を見出そうとするためであった。筆者は今、その共通性を全面的に論ずることは避けるが、以下に述べる一点だけは指摘しておきたいのである。

石川氏によると、曾秋の思想は、上河淇水の朱子学根拠説を継承したものであって、「その独自性は教化普及の勢力の上に認められるのみ」と^{註二}言う。曾秋は地方に輩出した心学者として、その地の中核となったが、^{註二}いわば「京都心学の思想取次ぎ人」として、教化第一の活動に徹したわけである。とするなら、その思想の理解のためには、淇水まで遡らねばならない。

淇水は、町人社会に生きる個人のための実践的思想として確立した石田梅岩の学が、次第に社会教化的な面に力点を移して行く時点で、その思想体系を儒教的説明によって再編成した人物と見做されている。^{註三}石川氏によると、淇水は、手島堵庵の「思案なし」の論に依拠しながら、これを「私案なし」の論に作り変え、程伊川の無私心の論で補強したと言う。例えば淇水は、堵庵の遺稿『私案なしの説』(文化二刊)の編纂に際しても、自らの説を多く頭注に加えたのである。淇水の論と堵庵の論とは、およそ次のような点で異なる。

まず、堵庵の述べる「思案なし」について記すと、それは次のようなものであった。

「人之所^レ不^レ学而能者其良能也。所^レ不^レ慮而知者其良知也」。本心を知るは外の事にあらず。此無我無知の本体を知る事なり。故に女童却て甚近く發明しやすし。其いはれいかなれば、初より我すくなし。我を拙しとして用ひず、師を恐れ信ずる事厚く、又教示を龜に聞ず、指南により彼思案を捨て、偏に師に帰するを以て也。(安永二・知心弁疑)

本心を知れば我なし。我なければ天地万物を吾とす。何物をか愛せざらん。愛すれども私なし。(同)

人間は、外界を正しく写し取り、正しく相接しようとして、絶え間なく働き続ける「本心」を持つ。その「本心」の自らなる働き―「思ふ」を中断させ、誤りや悪に逸脱させるのは「我」であり、「思案」である。「我なし」「思案なし」の状態でありさえすれば、人間は外界に常に正しく相応じ、正しく働きかけることができる。堵庵のかかる理論は、梅岩の思想が内包した社会体制への批判を失って、まったく個人的な処生訓に矮小化されたと言われるが、それでも個人の主体的な精神生活の態度・方法を示すものだったと思われる。それが淇水の「私案なし」に至ると、逆にその個人の主体的な意志の発動を規制するものとなり、堵庵の思想の対立物へと変質した。それは、「我なし」「思案なし」が主体的な個人の問題から切り離されて、社会的倫理の範疇に組み込まれ、寛政の思想統制策に順応した、道德教化運動の理論に転化したことを意味する。

筆者が、蕉門俳諧と心学の共通的性格として是非指摘しておきたいのは、この「我」「私」を去るといふ外界への対し方である。堵庵の論が、先に掲げた俳人たちの論にきわめて類似することを、読者はすでに気付かれたであろう。今筆者は、その両者の論の共通性が、いずれかの影響によるものと断ずるつもりはない。ただ、同質のものであったからこそ、蕉門俳諧に遊んだ曾秋が、容易に心学者となり得たことを主張したのである。曾秋は淇水の徒であった。しかしそれに先んじて、沂風のすすめで堵庵に面会していたことは、すでに述べた通りである。まず堵庵の思想が受け容れられ、その後淇水の影響があつて自らの思想を進展させた、と理解して差支えあるまい。俳諧の師蝶夢も、堵庵に關心を示しており、^{註一四}曾秋が蝶夢と堵庵の思想について語ったこと

も、充分想像できる。また一方では、淇水の心学教化運動が、蝶夢等の蕉門中興運動と同質のものとして曾秋に理解され、その結果、淇水指導の活動への参加が自然な形でなされることも、充分あり得たと思われる。蕉門俳壇では、「俳諧は衆人を導く最上の法」(既白・やぶれ笠)と真面目に考えられていたからである。

三

前章では、蕉門俳諧と石門心学に共通の性格があり、かかる事情が、曾秋にその二を矛盾なく両立せしめたことを説こうとした。本章では、熱心に励んだ蕉門俳諧から後半生を捧げる心学へと、その活動の中心を移す過渡期にあつて、曾秋が著述した一書を紹介することにしよう。

それは、大本二冊に認められた隨筆で、題名を与えられていないから、いま「曾秋隨筆」と仮題しておこう。署名はないが、内容と伝来から考えて、曾秋著であることは間違いない。寛政元年九月の記事で終るから、当時の成立と推定し得る。立川欽一氏の所蔵で、自筆草稿本・同清書本の二種があり、草稿本は一〇一段、清書本は八三段を収める。墨付の丁数で示せば、草稿本の第一冊三九丁、第二冊一五丁、清書本の第一冊二五丁、第二冊一五丁である。草稿本には、蝶夢による綿密な添削の書き込みや付箋があり、章段の削除も指示されていて、清書本が、蝶夢の指導を忠実に生かして浄書されたものであることは、両者を比較すればたちまち明らかになる。立川家には蝶夢添削の句稿も残るが、ともに蝶夢の懇切な指導ぶりを窺う好資料と言えよう。本稿では、ひとまず清書本全文を翻刻して^{註一五}付載した。以下清書本の内容に従って、問題点を指摘する。

この隨筆の内容を検討して、まず気付くのは、歌人・画人・書家など

た、一地方人の生な感情が、ここに記録されたと言えるであろう。思ひ出されるのは、曾秋とも交友があった、俳人塘雨の書簡（四月十一日付）である。塘雨は江戸から、日向の可笛に宛てて「時移世替、今ハ田沼侯の邸迄廢壞之形状、懐旧之情相催申候。」と書き送っていた。曾秋の記事より後年に属するが、俳人たちの意識は、政権担当者への動向に、かように敏感に反応していたわけである。（本書にも、意次に関する記事が二段⑬⑭ほど見えている。）ところで曾秋が、高く評価する定信の、その文教政策をも支持したことは想像に難くない。儒者柴野栗山の東下に際し、師蝶夢が、

柴栗山先生東行餞別会に、

年比の学徳いちしるく、東へもきこえて、公の召を蒙らせ給ひけるいさをしは申もさらに、かしこきを用ひ奉させ給ふ御代に生逢しは、大かたならぬ天か下のよろこひなるへし。

世のために猶ふみわけよ雪の道

（自筆句帳）

の句を贈ったのと軌を一にし、曾秋もまたその壮挙を慶賀して、「福蒼生」の語ある留別詩を書き留める⑳のである。曾秋の心学転進を考える上で、注意すべき事柄と思われる。

ここで、俳諧に関して興味ある記事を紹介しよう。定信と親しかった伊勢神戸藩主本多忠永について述べる段㉑で、遊蕩のため「民をおさむるの徳はなかりしが、去年より年来の御ふるまひ改りて、美人をしりぞけ、賢人を招き、その民をおさめ給ふ」ようになったと、やや皮肉まじりに大名を評している。寛政改革が、まず定信の周辺から実を結ぶのが知られるが、筆者には、この忠永が、清秋と俳号した旨原門の有力メンバーであったことが、ことに意味深く思われる。江戸座は、曾秋等の属した蕉門俳壇と対立的に存在し、都市の消費生活に基盤を持つ俳壇だったからである。ともあれ曾秋は、すでにこの時点で、藩主クラスの為政

に批判を抱いていた。そして賢君を期待した。すぐれた為政者の記事は本書中にも見え④⑤、かような意識は、後年の実践活動に受け継がれて行く。石川氏によると、曾秋は文化六年頃、近江宮川藩主堀田豊前守正毅に講義しており、その依頼で領内を巡講したと言註一六い、この外にも、曾秋が信頼を得た藩主は多い。この隨筆の内容は、そのまま心学活動に連続するものを持つようである。

藩主層に対してさえしかりであるから、曾秋が、在郷の指導者層の在り方に対し、明確な理念を抱いたのは至極当然と言える。油日村源左衛門㉗とか丹後の五宝十右衛門㉘など、まさしくその理念に一致して、「常に人の愁を己か事とおもひな」す仁者であり、曾秋もまた同じ階層に属するのであった。曾秋は、源左衛門や十右衛門のような役割りを、新しい道徳思想の伝達普及という形で担おうとしたに違いない。曾秋の生き方は、その『事蹟』からも窺えるが、この隨筆の内容として、農耕の技術・慣習に及ぶ段㉑㉒や漢方・灸治につき述べる段㉓㉔㉕㉖など、民生上に役立つ知識を多く含むのも、いかにも農村知識人の著作にふさわしい。曾秋は、心学の講壇に立った際、この隨筆中の話柄を用いることもあったのではなからうか。素材として適切なもの多く、生き生きとした会話文体を含む㉗など、そのままの語り口で利用され得たであろう。

淇水の心学は、広範な社会教化を特色とするものであった。それは、都市中心の心学が、農村へと拡大されることを意味した。曾秋は、農村の知識人として、その尖兵の役割りを果たした。役割りを担うに充分な見識を、蕉門俳諧の教養で身につけていたからこそ、曾秋はそれをなした得たと思われる。その見識を裏付ける最良の資料が、この『曾秋隨筆』であり、その内容は、師蝶夢の影響によるところが、きわめて大きいと考註一七えられる。

最後に筆者は、曾秋に真剣な社会教化活動を決意させた要因として、百姓一揆などの社会不安を指摘しておきたい。蝶夢を始め、曾秋と交友ある俳人たちの書簡にもしばしば言及があつて、蕉門俳諧の精神性希求も、石門心学の地方展開も、等しくこの社会不安を土壤とすると考えられる。両者が共通的性格を持つ理由もまたそこに求め得るであろう。重要な問題であるが今後の検討にゆだねることとし、本稿をここで結ぶことにする。

註

- 一 写本一冊。半紙本、墨付六丁。書名なく、いま石川謙氏が用いた名称に従う。心学をも継いだ次男立川葉山の稿であろう。
- 二 原本の抹消部は、、、で、補入・訂正部は()内に示した。
- 三 立川欽一氏所蔵文書、同氏談、また石川氏の著書であるが、一々記さなかつた。
- 四 家業の継承は『事蹟』に、家督の相続は『石門心学史の研究』四一三ページに記す。これらに従い、二次にわたるものと理解した。
- 五 石川氏は、『石門心学史の研究』一一八ページで、「植村賢道によって心学の門に入ったと伝えられてゐる」と記す。
- 六 同書六二二ページ。
- 七 同書六一一ページ他に「富田氏宅」とある。これは杜音没後のことになるが、生前にも何らかの協力があつたであろう。
- 八 同書四一四ページ他。
- 九 菊山当年男氏『はせを』一七七ページ。
- 一〇 『石門心学史の研究』六〇五ページ他。六一七ページには西村恕安宅とあり、恕安は、明倫舎都講にゆかり深い心学者だつたと言ふ(六二九ページ)。恕安を曾秋の三男重昭にあてゐるのは、立川欽一氏の御示教によつた。
- 一一 拙稿「二柳の俳論」(『近世大阪芸文叢談』収)三一〇ページ参照。
- 一二 『石門心学史の研究』一一八・一三五ページ。
- 一三 同書九八ページ以下。また、堵庵の論の理解も、多く同書による。

- 一四 蝶夢の寛政五年正月十四日付杜音宛書簡に、かなり長文の言及がある。
 - 一五 翻刻の際、異体字などは多く通用表記に改めた。
 - 一六 『石門心学史の研究』一〇九九・一二八八ページ。
 - 一七 北田紫水氏『俳僧蝶夢』四一七ページには、『幻阿上人隨筆』一冊の伝存を記している。未見ながら、おそらく『曾秋隨筆』の内容に近似すると思われる。
 - 一八 拙稿「蝶夢を扶けた人々——俳諧中興運動の地方的基盤——」(日本文学研究資料叢書『蕪村・一茶』収)二六〇ページ参照。
- 付記 多数の資料を御提供の上に御示教を惜しまれなかつた立川欽一氏、資料閲覧に際してお骨折りくださった大庭勝一氏、書簡解説につき学恩を蒙つた大内初夫氏に、心から厚く御礼申しあげる。

〔曾秋隨筆〕 巻

「表紙

- ① 安永九年の十二月三十日、節分なり。ことし、元日立春なり。子の年なり。諒闇なり。(原本コソ) 先帝を後の桃園院と申奉る。丑の年四月、天明と改元ありて、辰のとしの春、諸国米の価たうとくて、伊賀の国に松の皮を米の粉にあはしてくらふ事あり。同しくに孝子留松といふものあり。国守より物贈る。その事を書て、孝子伝をつくる。
- ② まへの年七月、いつかたとなく日夜鳴動す。何の音といふことをしらて、日を過しけり。しなの、国浅間か嶽のやけたるにて有けるよし。さしも大山のやけ崩れけるに、麓の里は人家崩れ、利根河などいふ大河までも、その焼出し石に河水も湯となりあせけるとなん。上野の国高崎といふ所に一紅といふ老女、『文月物語』といふもの書て、

その事しるせり。小野彦総は、この折から吾妻に下り申されけるか、父の命せられしまゝに東海道を下られけるか、木曾^ウ路にかゝる變ありて、これへおもむきし人は、みな道路をうしなひ、あるは横死の事もありしに、この人はつゝかもなく下りて、公の務をせられけり。日ころ孝心の厚き、こゝに頭れけるか。

③ 澄月上人は天台の学侶なり。遁世して大原山に庵してかくれ給ひけるか、遙に年経て後、大原あたりに行て、もと住給ふけると覚え給ふ谷かけを尋入り見給えは、今もすむ人のありと見えて、柴の戸^ウさしけるを見給ひて、

大原やむかしの夢の跡とへは結ひしまゝの庵は有けり

④ 祐為と申すは、加茂の県主なり。家きはめてまつしかりければ、『源氏ものかたり』を書写せんに料紙のなかりければ、「こゝろあらん輩は料紙えさせよ」と壁に書てはり置り。やかて写し終りけるに、そのおくに、「此料紙何ほと何某施しぬ」と、仏者の寄附の檀那の名書ることくしるされし、すせうにこそ。年の葉を^ウよめる歌に、

身につもる年はおもはず思ふ子のをひゆく末をかそへてそまつ

⑤ 清といへる女は、みのゝ国五筑坊か妻女の姪なり。和歌よみて情ありし女なりけるか、はしめ人に嫁して居りしか、ゆへありて離縁しける。その夫、そのゝちこの女にうちたはむれて、ものかたらひたき風情なりけるに、

秋にあひて枯にしものを今さらに何おとろかす萩の上かせ

⑥ ひたちの国土浦の武士、妻をむかへけるに、その婦女^ウかた目なりければ、うとみてこと女をむかへたくおもふけるに、かの婦女のよめる、

みめよきはおとこのために不幸なり女房は家のかためなるものをこれは、やまとうたの道にはかなふへきにもあらざるへけれど、わか

き人のこゝろ得ともなるへきにや。

⑦ 天明六年ひのへ午の元日に、暈蝕皆既にて、万物黄に見えてくらくなる。この心をやよみけん、蘆庵の歌に、

あまつ日のみかけかくせしいにしえをしはし見せける空もかしこし^ウ

この人は、ことなること歌によむをこのまれけるにや。狸の出て人を驚しけるとて愁ひける人の家にて、

穴さひしませ鼓うて琴ひかんわれ琴弾んませ鼓うて

また、きらゝ坂に慈悲心鳥の啼けるとて、

御ほとけの心を声になく鳥のすかたは人に見えずやあらなん

⑧ これは日光の御山にても啼けるよし、鶴川筑後守と申人のかたられけるにて、伴の蒿蹊なる人も、

慈悲心となく声きけは鳥にたにしかぬ我か身のはつかしきかな^ウその外にもこの鳥をよめるはおほし。さて、この蒿蹊と申すはさえたくましき人にて、『国歌或問』『国津文世々の迹』等の書をつくられる。

⑨ 京に住る何かしとかいふ医師、ある夜人のもとめに応してのりものにかきのせられて行けるに、夜くらくて東西をもわかす、行先とをくっていたく更わたるころ、あやしの住家にいたりぬ。ますらをともものあまた居りける中に、金瘡をやめるものありて、これに薬をあたへける。さて、聞なれぬ鳥の^ウ声きこえて、仏法^ウとなくなり。いとこゝろ多す思ひ、かへりてのち人にあひてしか^ウと^ウかたりければ、「仏法となく鳥は、松尾山に住侍るやらん。古人この山にこの鳥をよめる歌あり。さてこもり居るものは、しらなみのたくひにてやあらん。」といふ。そのゝち、時の諸司代板倉殿、そのくすしをめて、さるものともからめとりて見せさせ給ふとて、「国歌のよみ合せによ

りて、松尾よとはしれり。」と仰ありけるとそ。またこの鳥を、よしのやまにてきよ侍るよし。『浅井の去何か発句に、

声すむや秋のよし野は仏法僧

⑩ ひのへ午は陽のまされる年なれと、元日の暈蝕にてまされる陽気をよさへけるにや、春より秋にいたりて雨ふりつゝく。七月、諸国洪水して地震・神鳴しはくす。女の、雷の落るにあふて即死せしもの、ちかきあたりになたゝひ聞く。此年、病狼おほく出て、伊賀の国阿波山といふ所にて、多人をそこなふ。関東の御家人高崎次郎兵衛といふ武士、⁵この所にて狼ふたつを切ころす。

⑪ こさといふものは、ゑそのゑひすともふきける笛のたくひなるなり。『新選六帖』に証歌あり。南部の素郷、こさひとつをもとめて都にのほしける時、澄月上人、

雲霧を吹すたりしこさやこれゑそか千島もおさまれる世に

⑫ とよきの矢といへるも、かの島につくれるなるよし。矢つかは鹿の骨に柳をつきて、羽は鶯なり。矢の根は竹にて巾ひろくつくり、すこしくつみたる所ありて、その中に毒をいれ、⁶たつ矢をぬけども、やしり残りてかの毒にあたる工なり。

あさましや千しまのゑそかつくるなるとよきの矢こそ隙はもるなれ

『袖中抄』に、顕昭も読人を奉給はず。後に人のいふを聞は、左京大夫顕輔卿の歌にてしのふ恋といふ題あり。それにて、恋のこころかくれなく聞ゆるにや。

⑬ 八月、^(原本ココ)幕下薨せさせ給ひて、白川の侯、政をとらせたまふ。^(テ改行ス)

⑭ 十一月朔旦、冬至の調進ものゝ中に、餅米・粟・大角豆を⁷ひとつにかしきて奉るを、かしきませとよなふとかや。かしこけれと今上の御製、

天行南経一陽来 春信含香冬至梅

盛礼復依周代古 乾々生意聖庭開

⑮ 未の正月、山しなの郷より白鳥を献し奉るに、家くこれをかうかえさせ給ひ、祥瑞鳥なるによりて、狩人のたくひあやまち申ましきおもむき、官庁よりふれられけるとかや。

⑯ やしほの岡といふ所をたつねはへれと、牛牽る翁、田くき取女などはつゆもしらす。長谷川を経て、かすかなる寺院のありけるによりて見れば、いととうとくしき老僧のすめるあり。やかてかの岡の事たつね侍りしかは、法華庵といひて尋ねへきよし、おしえられける。さて里の子にたつねゆけは、やかてかの岡にいたりけり。これは、いにしえ公任大納言のすませ給ふける所にて、『栄花物語』に「斉信民部卿の、公任卿発心の後尋ねおはして先せられ奉り侍ぬれば、いまは二の舞にて、人の御まねをするになりぬへきかはと口惜し」とあるもこの所にや、とおほえ侍る。またこのやしほの岡に、西行上人の歌あり。かゝる所かろうして尋ねありく、いと興あるものなり。

⑰ 去年、五穀みのらす、世のなかいふせく、春より夏にいたりて、米のあたひ常にこえて、はては洛中へ米はこふ舟・車なく、うゑ人おほくいてきぬ。六月はしめつかたより、御千度めぐりとて、禁裡の御築地をめくるに、洛中の貴賤むらかり出づ。かくして、世のなかをたやかにりける。古きためし、ありとかや。

⑱ 八月十五日、九月十三日、月、清明。

⑲ 大雅道人は、書画に名たかき人なり。墓は菊溪にあり。その妻玉蘭といへりしも、書画をなす。夫婦とも、常にかたちつくることなし。下河原に、ふるく荒たる家に住てありし。この道人の像ならひに伝など、三熊海棠か書るあり。さて、この海棠といえるも画人なり。年く、花暦といへるものかうかえ⁸出しける。南部の盲暦といふも

のゝたくひにはあらず。

- ⑳ 鈴木周敬といふ人は、まれなる隠逸の人なり。大仏の菅谷といふ谷に臨める所に住居しけるか、なへての音律にたえなる人にて、催馬楽・朗詠の類ひより琴・琵琶はさらにもいはず、一節切なといふものまでも堪能の聞えあり。

- ㉑ みよしのは、名にあふ所にて、花にはわきてなつかしむところなれと、山ふかくて優ならず。嵐山は、水にそふて。花のけしきもいとしほらしき所なりとおもへり。画師蕪村は、はしめてよし野々花をみるとき、多武の峰の峠よりこの山を見おろして、「けに花のよし野といへる風景、世にならひなかるへし。山の広きには、よしの川のかく隔りあらされは、画にかきて風景かきつくされず。」と云り。誠に何の道にもあれ、人にすくれて得し人の見るところ、庸人の眼とははるかにたかえり。⁹⁷

- ㉒ 浮流法師、庵に端午にあふて、

菖蒲ふきて色こくせはや草の庵

といふほくして、「をのれすまふ庵とおもへは、庭のちり芥もとりすてたくなりぬ。樹下石上にも信宿せずといへる 仏の教とふとし。また血気さかんなるうちは、ものに恥つゝしみ事におそれて、発句のひとつをもふかく思ひをゆたね侍る。年老にたらは、いかゝあらん、四十にたらて死なんこそめやすけれといへる、又とふとし。」と云り。¹⁰

- ㉓ 文梁上人は、若きよりいみじき念仏の行者なりけり。

- ㉔ 馬瓢は、井伊家の御林をあつかりおれり。名を中西次右衛門といふ。としころ風雅をこのみて、また農作をたのしむ。あるときこの人の長なる人、公の事を申しのへけるついで、風雅のことを尋ね申されければ、座をたちていふやう、「次右衛門なれば爰に座せとも、馬瓢の時はそなたより上に座し申へし。」といへりとかや。景清・七兵衛

の類にや、いとおかし。ひととせ、更科の月にひとりおもむきて、¹⁰⁷

姨捨や袖かき合すけふの月

- ㉕ 髭風老人、うきす庵にかり住せられける比、文の中のたはむれに、「市中の隠者と山家の俗人と等類ならん」と申つかはしければ、老人いたく笑はれけり。

- ㉖ 花やかなる所（「人」ヲ消シテ「所」トス）にすむ人は、姿かたちうつくしく、あなかの山かつはいと見くるし。心のすゝやかに、へつらひなき事は、うつくしき人の姿かたちひとしかるへし。

- ㉗ ことし大掌（大）会行はせ給ふ。悠記・主基の立御殿とて、茅葺に黒木の鳥居かうくしく、その御屏風の和歌は、近江と丹波の名所を、鳥丸・日野二両家より詠進あり、絵は、絵所預土佐守、文字は、書博士甲斐守の書て奉れるとか。

- ㉘ 柴野彦明といふ儒者、幕府より召ありて下られけるに、洛陽の諸友へ留別の詩の中に、

詩書雖宿好 大義非所明 豈有經濟略

可以福蒼生 況乃衰病余 何以勝簪纓

¹¹⁷

の句あり。誠に君々たりといふへき時にや。先生、栗山といふ。讃岐の八栗山の辺りの人なり。年いまた五十に三をあませり。「行すゑたのもし。」など世の人いひあはれける。

- ㉙ 備後の国禹余糧谷といふ所にて、百歳の老婆、身すくやかにして、みつから苧をうみ笠をぬふ。其笠をうらふ笠とて、友人風葉をくれり。

- ㉚ 文草の塚は、大津番場村の南、竜か岡といふ所にあり。灯籠の施主、「尾州犬城の土、文草弟内藤曠（建）」とあり。

- ㉛ 去来の塚は、真如堂にあり。

- ㉜ 天明八申歳正月三十日の暁かたより、洛東団栗の辻子より火おこり

て、良の風つよく南へ吹、さて巽にかはりて洛中へ飛び、大雲院先やけしより火の勢たけくなり、東本願寺・仏光寺・六角堂・因幡堂・誓願寺をはじめ一時に灰塵となり、西は壬生寺までやけゆき、洛中一字ものこらすやけあかり、戌の刻はかりに北野の社頭に火うつらんとす。¹²⁷この時神鳴しきりにとよろき出て、雨もつよく風忽西にかはりて、この御社はのこりけれと、終に内裏炎上す。^(原本ココ)主上、夜半に聖護院へ遷幸まし、^(デ改行ス)仙洞御所はかりに青蓮院にまし、^(原本ココ)ければ、むかしかたりの里大裡と申に似て、女院・女一の宮・何の門院など申奉るは、北やま・にし山いつくとなくにけさせ給ふ。まして洛中の貴賤は、野山となくなきさまよひ、田舎の縁もとめなどして落ゆく。うたて浅ましなといはんかたなし。命ありて逃まとはは¹³猶幸にして、火の中に死するもの、いくそはくそともしらざるへし。そも八十年のむかし、三月八日油小路の火のために^(原本二字)炎上せしと聞く例も遠く、善つくし美尽し給ふ皇居の壯を尊ひ、四海安穩の思ひをなしけるに、いかなるおほんことにやと、安き心もあらず。西洞院入道殿のよませ給ふとて、

行なやむ煙のみちにおもふそよ君か御幸のつゝかなかれと
かく恐れある御事ともかいつけ侍る罪、かろからざるへけれと、虫けらにひとしき土民の身なれば、とかむる人もあるましかりける。¹³⁷
慈延上人の歌とて、

もろともに思ひの家を出よ人かゝるうき世をみるにつけても
けに猶如火宅のおしへはかみなかしもにわたりて、よのなかにありとあるたのしみとすることは、みな一時の煙なり。

³³ よし田啓齋といへるは、筆の道に名を得し人なり。かゝる中を逃るにも、その師の法帖数十巻をひとつもちらさず、東山の辺へ逃のかれしとかや。

³⁴ 高橋若狭守ときこへしは、御厨子所の預りと申にて、¹⁴八十有余まで有識の事にくはしく、生涯この事に思ひをゆたね、おほくのふみとも書て、今は四とせはかりのむかし人となり申されしに、かの文書をひめ置れし倉のこたひ灰塵となりける。かなしといふもあまりあり。

³⁵ 『翁草』の老人といへるは、これも八十になるまで世の中のこと書あつめたるもの百五十巻、『翁草』と名つけしよりあさ名せしにや。すへてふみに書のこせるものは、末代の記念にて、かたゐなかのかたくななるものも、ほのかにむかしを忍ひ、かみつかたの御¹⁴事をもうけたまはりつたへ、道に入るたつきともするならひなるに、たれかしらん、心つくしに書しるせるふみの、たちまち煙の中にうせ果んとは。

³⁶ 花山院殿の館を、白狐の守りてやけさりけるよし。「土おほねの敵をしりそけたるたくひにや、あやしのわさかな。」とおもひしに、ちかころ、豊後の国、松田といふくすし、洛にのほりくる道にて美少年の男にあひぬ。かの若男のいふやう、「われは何／＼の里にすむ狐なり。山城の国稲荷の社に参りて¹⁵官を得んと願へと、山野に犬のおそれ有て願はたさす。ねかはくは和殿このよしをつたえて、かの社の官をさつかり、しるしの箱を何／＼の所におきてよ。」とねもころにいひてうせぬ。かのくすし、けゐの思ひをなしなから、洛にのほりて、稲荷の社司羽倉氏が許にしか／＼とつたへければ、社司は日ころ例あることにや、いふかりおもふ体なく、官のしるしのひとつの箱をわたしぬ。さてその箱を、さきに白狐の化人かいひける所におきてわたしけるとかや。その箱を、かの医師か旅宅にて、¹⁵⁷幻阿上人見給ひしものかたりなり。

³⁷ サンコカイといふ鳥は、大き鳩のことくなりとかや。ちかころ京に

て、鳥屋又兵衛といふもの、いかにしてかこれをもとめ、そ⁽¹⁶⁾まゝ公の庁にたてまつりけるに、大に感しまし⁽¹⁷⁾て、即時にかの鳥を幕下に献し給ふ。比類なき薬になるものとかや。何の病の薬にやありけん。

③⑧ ある男、遊君に契をかはすことありけるにいつしかわりなき思ひをなして、ふかくかたらひけり。かの女、容顔人に¹⁶すくれて、心さしいやしからさりければ、男もとかくあはれみをかけて、年ころふるまゝにつゝみへたゝる心なければ、ある時間の内にてこしかた行すゑをおもひて、「その父母はいかゝましますぞ。」と尋ければ、女のいふやう、「父母ともに、いとけなきとき別れまいらせてのち、風の便もきかす。生死の事もしらす。」といふ。男いとゝかなしくおもひて、「ひんなきふるまひかな。さはあれ、その行衛たつねきけよ。」と申ければ、女は、「われをかく浅ましき道に売れるはかりのつれなき親々の事、露もおもわす。い¹⁷たゝ何ともなし。」といふに、男、興さめて、「心にはさもあらし。」とうかゝひ見れとも、しちに心にもかけぬさまなりければ、「親をさへおもはぬ、まことにうかれ女のはしたなきなめり。」とうとみおもひて、そののちはふたゝひこの女のもとへかよはさりけるとかや。

③⑨ 正月三十日、いかなる日にてやありけん。都に火の災ひおそろしく浅ましきかうへに、江府に雷なりおち雨いたくふり、播磨の灘には風のために大船二艘・小舟四十六艘くつかへりうせけるよし。その余の国々、大木吹たをれ軒の瓦おちくたけぬる類は、かそふる¹⁷にいとまあらず、民家ひしけて死につくもの、おほく有けるよし。

④① 二月、諸司代和泉守殿京につかせ給ひ、洛中へ米三千石・銀百貫目賜りけり。丹州龜山の城主紀伊守殿、京に火のおこり初けるよりはせ登りて、かゝる中の 皇居を守護し給ひしとそ。

④① 聖護院は、寺の長吏なるかゆへに山の大衆いきとほりて、昔の例により 皇居を妙法院にうつし奉るべきよし、訴申すといへとも、とかくして民の煩ひとなるべく 叡慮おは¹⁷しましければ、女院・新女院、北山におはしましけるを妙法院に遷し奉りて、山門の強訴のきたはやみけり。

④② こたひ京のやけたるは、ふかく浅ましと思ひしかと、久しく御代治りて、上下の奢日々に超過しければ、天の怒ある変ならんかし。そも奢といふは、衣食住の三ツを貪るにおこりて、これかために金銭を費し、費のために金銭をいやかうへに求めんとす。上より下に至り⁽¹⁸⁾るを⁽¹⁹⁾む⁽²⁰⁾て、これに心あればひとしく乱をなすものに似たり。おとゝし五穀みのらす、去年の夏は世にうへ人おほくいてきて、まつ食¹⁸におくれるものこれをつゝし、ことし火のために洛陽の千門万戸一時にやけうせて居をたのしむわきなくなる。さて白川の侯の政事によて、錦繡綾羅はうへの服といふことしりぬ。「しかあればおのつから心あらたまりて、身はいやしくととも、おのゝその児孫なく家を保んことをねかひて、ますゝ安穩の思ひをなすへし。」とある人仰られし。いかなるものゝ口すさみけるにや、

都には花も紅葉もなかりけりくらるとまやのはるの曙

187

④③ 水口に住ける大仰といふ法師は、古冷泉大納言殿の和歌の門人なり。ひとゝせおくの松島一見すとて、みなくちをたちてゆくといふことを句ことの沓冠におきて、

見をくれた雲たつ山路をちのかた千里をわけてゆくみちのおくといふ歌をはしめによみて、道の歌ともあまたよみけるを、大納言殿見給ひて称嘆せさせ給ひけるよし。この人、壮年にて髪おろしける時、その妻もおなしくさまをかへけるに、¹⁹つかひけるひとり童子

部もおなじさまになりて、道に入ける。いかなる前世の因縁にやありけん。

④④ 飯道寺の關加の井に、つゆ玉といふものありける。入梅のころ、水の泡かとみるものいてきて、二日三日のうち水をはなれて、草の葉木の枝につきてしろくひかり、大さ手鞠のこといてきて、夏至より小暑までの間に消ける。年々多少のたかひありとぞ。

④⑤ 石山寺の本堂は、山しけりてほのくらく、拝をなす時、心しま¹⁹りてことさらに尊し。三井寺は、湖水の気色に魂うははれて、(以下余白)

④⑥ ある法師すむ寺に火のおこりけるとき、あはたしく逃出てふるひわななき居けるに、その居りける所へもやかてちかくもえ来れば、また外へにけ行んとするに、いたくおもたけなる挾箱ひとつを、弟子の房とともにからうしてかへゆくを、あたりの人見とかめて、「僧都、何をもて行給ふ。」ととふに、「これは、わか年来たくはへし、こかね・しろかねを入れたるなり。もたてやは行へき。」といふに、「僧都、本尊²⁰の御仏はいかゝなし給へる。」と尋ねければ、「本尊はいかゝなり給へるや、をのれしらす。」と答ふるに、かのもの興さめて、「本尊ならせ給ふはてもしらすして、いかて財をいたくおし給ふぞ。」と又とひければ、「本尊たとへやけうせ給ふといふとも、この箱のうちのこかねをもて求んに、何のわつらひかあらん。」と申ける。この僧、のちに還俗してけり。「末の世とは申なから、あさましの僧の心なりける。」とある人かたられ侍る。

④⑦ 溪満六と申せしは、土佐の国の人なり。さえたかく、医をも²⁰なし、又、風雲の思ひふかゝりける。あらし山の花にあそひて、夕つかた松尾山にのぼるとき、人々酔つくして道ふみまとひければ、「跡へや帰らん、先へやすまさん。」といひのゝしりければ、「道はふみ迷ひてこそ興あれ。」とぞ申されける。

④⑧ 「花のさかりは立春より七十五日、と書れしかと、口のよし野は七十日にさかりなり。年の寒暖にもよらず。」と大和の国、白魚老人のいえり。あらし山も、これにおなじくおほえ侍る。

④⑨ 伊賀の国岡のゝ里に、弥兵衛といふ農民、田地を開発²¹せんとて藪を穿ちければ、金をほり出しけり。老歩のこかね四十三片ありけり。この藪は、三七といふ者、むかし住ける迹なりければ、かのこかねを三七にもとしあたへんといふに、三七、まつしけれども正直なる若者にて、うけかはず、「価を得てうりたる地に有し金なれば、をのれとるへきいはれなし。」といふに、弥兵衛か申すやう、「藪こそ買ぬれ、金は有へしともおもひぬへき事かは。」とてあらそひければ、斤にうたへぬ。双方ともまめやかなる志を感じおほして、金は三七にたまはり、弥兵衛には²²小袖・腰のものなど賜りけり。

④⑩ 暮春のころ野山をやくことは、田をうへてのち、鹿猪の類に苗をくらはしめざるためなり。そのゆへは、やきし野やまに枯葉はなくて、つはな蕨やうの若葉のもえ出るにつきて、田地のところまてはいてこぬなり。いみしきはかりことにこそ。

④⑪ さひらきには、栗の枝に紙手きりかけ、はしめてうゆる苗をこれか前におき、むしよね・酒なとそなへ、この枝を田の神とあかめ申て、さなほりの日まで家のうちにおくなり。²³

④⑫ 田をうゆるに下手なるもの、左右みなうへしされとおくれて居るほとに、うへせはめられて出くちほそくなるを、壺に入るといふ。

④⑬ 山城の国和束といふ所に、癩病の薬あり。これを服していゑたるもの、あまた見はへる。

④⑭ 瀉痢は、八九月におほき疾なり。そのころかねてふくしおくへき薬、

黄柏 葛根 寒翹はなをさる 各細末

22ウ

疾をうけてのちも、かるければ瀉痢こと／＼くいゆ。この方、丹後の国宮津の湊にてもはらおこなひけるよし、医師後藤何かし、かたられ侍る。常に霧ふかき所、この疾多しとそ。

⑤⑤ 四月十一日の夜戌の刻はかりに、天地にかゝやきて火の玉のことひかりわたりけるもの、良の方より南のかたへ飛行しけり。ほかけ夕陽にひとしく、人家にてりこみければ、おとろき怪しむ。とみに跡かたなくなりぬ。

⑤⑥ おなし十五日、雷なりて氷ふる。

23

⑤⑦ 吾東法師やまふにつかせ給ふける時、をのれもやまふ事ありて京にとままり侍りしかは、とふらひまいらせけるに、法師の、いまはたのみすくなくおはしなから、「そなたはなにの疾ぞ。」と仰られけるに、「こゝちのむすほをれ侍るやらん。」と申侍る。「なんてうさる事あらん。万事は放下すへし。疾は、月にむら雲のたくひなり。よく／＼工夫めくらすへし。」と仰られける。そのうちほとなく、うせ給ひし。

⑤⑧ 横田川の南、三雲の郷妙感寺

今この所の村の名とす

と申は、むかし

23ウ 吉田の中

納言藤房の卿、隠遁の後かくれまし／＼けるところなり。そのころは、授翁宗弼禅師と申奉るを、妙心寺の二世の国師になさしめ奉りしなり。この所に、自の像をのこし給へり。はた書せ給ふ歌にも、「よのうさをよそにみくもの山ふかく」などあり、まのあたり押し奉る。

(三行分余白)

24

(余白)

24ウ

〔曾秋随筆〕

式

表紙

⑤⑨ 金勝山といふありて、金勝菩薩の開基といふ。西寺・ひかし寺とい

ふもこのあたりなり。元明天王和銅年中、かの菩薩の創造とかや。本堂・三重の塔、わつかに朽のこれり。和銅よりいま天明まで、およそ千三百年に及ぶ。おなし郷に阿弥陀寺と申すは、隆堯上人の遁世の迹なりとそ。

たちよりて影もうつきしなかれてはうき世に出る谷川の水かくよませ給ふといふ。又この歌、梅尾上人のよま「せ給ふとも聞くなるものを、

よそうさにかえぬる山のかくれ家をとほぬは人の情なりけり

これは、美濃の国虎溪の山寺にて、夢想国師のよませ給ふなるよし。ちかきころ深草の元政上人、

朽ねたゝ折ふし人のとひ来るも心にかゝる谷の柴橋

いつれ、隠逸の人のおもひなるへし。

⑥⑩ 大岡寺は、鴨長明の発心の所といひつたへ、『海道記』に歌あり。今この所に、何のしるしもなし。但、『海道記』は長明イならず、源光行といふ。

⑥① 頓阿法師の住給ひし迹、伊賀の国三田の山里に、ちかきころしるしの石建たり。『宗祇抄』云、いかの国の国分寺へまかりしに、頓阿法師の迹など、この寺に侍りしゆへに、いふかしく覚えられて、人に尋侍れば、この所に五六年も住けるよしいひたる、さるゆへにやとおほゆ。国分寺の坊の屏風に、自筆にてかゝれしちいさききれ有しか、その歌に、

とにかくにうき身をなをもなけくこそ心にすてぬこの世なりけり

2

⑥② 幻住庵の事、猿みの集にくはしくありて、今は古き迹なり。しるしの石、また傍に経塚のしるしあるは、近きころ、井口氏保孝これを書す。世の人しる所なり。しかるに、木曾寺の隣の庵に、「幻住庵」の

額を掛たり。遠国の人、爰に来て思ひまとふへし。これは、むかしの無名庵の迹なり。ちかころ、雲裡禪門むすひて、国分山の旧庵の椎の木をうゑ、有椎翁などみつから名乗しとそ。

⑥③ みの虫庵は、むかし土芳なる人の住捨し迹なり。はせを翁²の「みのむしの音を聞に來よ草の庵」と申されしを、名とせしにや。近き世、桐雨老人その迹にふたゝひ庵を結ひて、月に花に行かよひければ、人みなみのむしの主とそいひける。人麿さくらといへる桜の古木、なをあり。

⑥④ 浜名の橋のあたりを、今は新井の渡といひぬるは、橋のなければせんすへなきも、なを口おし。三上山をむかて山といふは、きくたひに口おしくおほゆ。

⑥⑤ 六月 白川侯御上洛ありて、中仙道より都に入り給ひ、³難波津に出、伊賀路を経て伊勢にこえ給ふ。道のほとも人馬のわつらひをはふぎ、さたまれる人馬の価をたまひ、官吏の賂をむさほるを罰し、民の家業にうときものをおとしめ給ひければ、俗を移し、風をかゆるにいたる。また、『国本論』『求言録』⁽⁴⁾『鸚鵡言』等の書を著述し給ひて、国政を補佐し給ふ事、細川頼之の後に聞さる賢臣也といふ。

⑥⑥ ふみ月中の八日、五升庵の柴の戸をたゝくに、折から和田³ 荆山先生、日向の塘雨老人も来りて、こしかたのもの話し給ふ。しりへに座して、ひと日の閑を得る。秋もまたたえかたき暑なれば、いさとしてうしろの泊庵にすゝまんと人々を具し給ふに、したかひまいらす。こゝはまた人氣遠ければや、昼ながら音になく虫のこゑすみ、萩のみたれたる、松風ひゝきあひていとさひし。京のやけし後は、慈延上人のもと住給ひし隣の庵も、何の頭の中將とかいふかたの住み給ひて、いとしつかに、人ありともみへぬさまなり。また、敷垣の北東の⁴かたに、やことなき管絃の聞え侍るは、一条の大臣のかり任せさせ給ふ

なる所なり。夕月のかけいとさやかに、くさくさの露きらめきわたる。かゝる山里に、雲のうへ人の罪なくて住せ給ふ。木の間かくれに烏帽子きたる人のたちさまよひ給ふは、みしのひありきし給ふにや、たゝ絵を見るこゝちす。めつらかなる世に侍るよと、みたりの老人、いよゝものかたり、ゑつほの会にそありし。

⑥⑦ 伊勢の国神戸の城主何かしの侯は、いとけなきより⁴ 白川の侯の学友にておはしけるとかや。年ころは、わいためなき戯をのみし給ひ、みめよき女をあまためして、民をおさむるの徳はなかりしか、去年より年来の御ふるまひ改りて、美人をしりそけ、賢人を招き、その民をおさめ給ふ。この年比のふるまひは、ゆへありし事とかや。

⑥⑧ 山崎の宗鑑の井は、「飲んとすれと夏の沢水」と、近衛殿に脇の句奉りし迹ならん。今は、関戸院の道の⁵。傍に、とあるあき人の家のうらなり。おとゝしの春、この井を尋ねしころ、住ける人の、草かり石ならへて井を掃除しけるに、いと興さめて覚へぬ。

⑥⑨ 八月十日あまり、湖水にあそひて、「月さし入れよ」とありける浮御堂のあたりみんとてゆく。みち、水あふれて行わつらふに、日も西にかたふくころ、空うちくもりて雷なりとゝろく。かろうして堅田に着き、海士か伏家に宿もとむれと、月見るへくもあらねは、⁵ 人々たゝうち侘ていぬ。そのゝちある人、この事聞て難して云、「遊山翫水は、およそ四美を多らむ中にも、ゆくさきの興をのみおもひて、不覚に出るは、わつらひ多し。」とそ。

⑦⑩ したしくましらへる僧何かし、まつ宵の夜の雨の中に簑笠うちかつきて、大津よりやはたに詣てられけるを見て、ものこのみのやうにおもひけるに、亥の刻はかりより、そらきらひやかにわたりて、うらやましかりしか、帰りて後の⁶ものかたりに、「十五日の曙、神輿、山を下らせ給ふよそほひ、よにたうとくて、

この朝天(くか)かたるかと月の人

といふ句口すさみける。」と。かの登蓮の薄のためしもおもひあはせられて覚ゆ。

⑦① やんことなき人、ねちつよき疾にて終にのそみ給ふとき、いとくるしけに声をあけて、「なき事とのみおもひしに、こは有けるよ。」といひて落入給ふよし。この君つねに儒道を崇め給ひ、仏道は疎かりけるゆへにや。御臨終にいかなるハ悪相をや見給ひけん。年経て後、その家臣なる人、「かゝるさまのあたり見候ひし。よきに追福いとなみてたひ給へ。」とて、清浄華院の上人にたのみけるよし、上人の物かたりなりしとぞ。

⑦② 隨の陳仁陵の書し『襄陽石刻陀經』、筑前州宗像の浦にあり。小松の内府の、異国の育王山へこかねをおくらせ給ひける、その酬におくりけるものなるに、その比、平家ほろひて源氏の世となりて、これをいれんこと、ケ鎌倉の聞へをはかりて、その石をとりあくへきものなかりしに、宗像大宮司なる人、ひろひてかの社内に立おきける。世に普通の『阿弥陀經』に脱せし、「一心不乱」以下廿一字の文あり。此石經の事は、宋の竜舒の『浄土文』をはじめ、此国の仏書にもあまた見えて、世にしれる名石なり。石の中式尺五寸、高サ四尺八寸、厚サ九寸、石の色むらさきなるよし。表に弥陀の座像を刻み、上に六字の名号を書す。經文は裏にあり。この事は、去年文梁上人九国に下り給ひ、ハ歸京の後のもの語りなり。又、色定法師が一筆にて書写せし『一切經』も、この社宝となれりとかや。法師廿九歳、文治三年四月より始て筆をこし、嘉祿二年に功なる。その間四十一年なり。經卷のすへに、「建曆三年書写、比丘宮祐法師」など書り。又は「建久六年一切經一筆行人、比丘良祐」とも、或は「文治三年、僧良祐」とも書り。この外は、「色定」と書り。この色定法師は、田島の

座主兼祐か子にて、字を良祐といふ。聖福寺開山栄西禪師の法のほらからなり。一日法華四ハ功徳の文を誦して、藏經一筆書写の大願を發し、入宋して安覺と云。『鶴林玉露』に日本僧安覺一切經を暗誦せし事をするせし、是なりといふ。「今は、此經盡多く、焼うせてたゞ四千六百卷となれり」と、貝原篤信か『筑前統風土記』にあり。

⑦③ 才ある人の才につかはれ、財ある人の財につかはるゝ、ともにうるさし。

⑦④ 俊鳳上人は、遁世のハちも護法のこゝろさしふかく、さえハたくましかりければ、『大乘戒義』などの書を著述せられたり。日々十方声の念仏懈怠なかりしに、ことし往生の後、灰中に舍利數粒を得るとぞ。

⑦⑤ 涌蓮法師、嵯峨の庵にてしらなみにあひて、
とられしとおもふ心もはつかしやかかねてなき身をおもひ忘れてまた、「寄七夕釈教」といふ題に、

まれにあふ御法なれとも七夕のひと夜はかりのよるこひもなし
⑦⑥ 三里の炙の事、信州草津の湯に入りし人に、ハ老翁のつたへ申せしとかや。月毎の朔日より八日まで、

朔日左右二十六宛 二日より八日まで左右七ツ宛
かくして怠らされは、よろつの疾、かならずいゆといふ。

⑦⑦ 油日村源左衛門といへる、直なる農民なり。常に人の愁を己か事とおもひなして、これを救はんとのみおもふ。ひとハせの凶年に、五穀価を出せともとハなひかたかりしに、源左衛門、所持の米ことくくわちちあたへ、なを金銀も有かきりわかち、後は家にもちつたへたる山林田島までうりひさきハて、貧しき人に施す。聞つたふるもの感嘆せざるはなし。しかあるに、源左衛門喉の奥にもいきてきて、面に腐通りて、いゑすして死す。風帳(かぜ)といふ疾なりと。この人にしてこの疾

とやいふへき。

⑦⑧ 丹後の国日間の浦に住る、五宝十右衛門なる人、その家ひさしく富て、人をあはれむ心さしきはめてふかく、風雅にもすける人にて、ひととせ、浮流法師その家に残し置ける茶碗を、法師かなき跡に塚に築て、茶碗塚をいとなみける。住るあたりのまつしきものに、あはれみをつくすことつねのことなり。去年他国船のやふれたるか、この浦ちかき所につきて日を経けるに、ある夜いつくともなく、船の中にかね数多を投げられるものあり。船の中の人、いとけるの思ひをなして、この浦辺に來りて尋もとめけれど、あらず。「五宝氏ならて、さる事すへき人はなし。」と、浦人申けるとそ。

⑦⑨ 十月十七日、幻阿上人にしたかひまいらせて、何かし宗兵衛^{10ウ}なる人を具して、東福寺の紅樹見にゆく。通天橋のほとりにて、沂風・誓好両法師にまみへ、ともに酒くみかはして遊ぶ。万寿寺のうちに、江雲隱士を訪ふ。さて、すけ谷の奥にかくれ住る鈴木先生のかりをとふらふ。暮山軒端にそひへ、数株の紅葉夕日に映す。そか中に七絃の雅琴を弾して、おのれか明日京を去らんといふによりて「離別難」とかいふ曲を弾せらる。優に情ある遊ひなめり。¹¹

⑧⑩ 何かし宗兵衛は、年ころ囲碁のすき人なるか、いふ。「碁をかこみて勝ことを欲せず、たゞ自然にかなひたる手をうちて、十とせを経て石ひとつすゝむを勝とす。いにしえより、囲碁このむ人の盤にむかひて、きわめてめつらしく未曾有のよき手うち出せるは、さま／＼あり。そもはしめの¹²「の」に改む¹³」一石より終までを、ひとつもすかさず、むりなる手をうたす、またく打終ること、かたき事にや、おほくはなし。」といへり。まことや、¹⁴歌をよむにも、「詞は、むかしよりよみならはせたる詞をもて、心は、あたらしくよむへきを、たゞつゝけからにて、よくもあしくもなりぬ」とかや。幽齋法印の書せ給ふも、今さら

に、よろつの道、みなつゝけからにこそよるへけれ。

⑧⑪ ある男、日ころ舞まふ事をこのみて、したしくましらひける男に別れをおしむとて、「をのかつたへたる秘蔵の舞一かなてまひて見せまいらせん。」といふ。この男は、この道にうとければ、「いかによく舞ひ給ふとも、おのれしらぬ道なれば、見るかいあらし。」と辞し申けれど、とかくいひてまいて見せける。さて舞おさめけるのち、見てありける男の、いたく感して申けるは、「おのれ、いとけなき比より鎗をたしむ侍れば、舞の道はしらねと、すぎ間あらは鎗の手をおろし申へしとうかゝひ侍りしに、そのすぎ間を得侍らす。但中ほとに、¹⁵扇をひらきて左の方へ歩み給ふとき、いさゝか拍子をはつれ候ひけるこゝちし侍りし。」といふ。まひける男、手をうつて大に感し、「さる事侍るへし。その時こそ、おのれか心のうちにおもふやう、かく秘蔵の事をまひて見せ申すといふとも、その道しらぬ人のみんには、何のかひもなし、とおもひしほとに、さはかりのすぎ間侍りしならん。」といへりしとかや。¹³

⑧⑫ 柳生但馬守の、家の術をまなひたる門人、「その奥義をきはめたり。」とおもふさまなりしにむかひて申されけるは、「かく修練のうへは、いかなる敵にあひても負ましとおもふへけれど、さにはあらず。たとへは今、ゆへもなきに我が奴を殺害せんに、その奴僕か一子ありて、何ゆへに我が父を殺害せしや。この怨、ともに天をいたゞくへからすとて、我にむかひて敵せんに、¹⁶われいかに秘術を尽すとも、勝へからず。かれは刃をつかふ道をしらす、我は奥義をしれるうへなれとも、勝へからざるのゆへを、人々工夫すへし。」とかや。

⑧⑬ 寛政元酉九月、伊勢御遷宮。

(三行分余白)

(余白)